病院図書室　14(3):93-94, 1994

巻頭言

図書室の悩み

社会保険中京病院副院長　大島　伸一

金がない、場所がない、というのがどの病院の図書室にも共通の悩みではあるまいか。この数年、病院の経営は悪化するばかりだ。経営改善でまず考えるのは経費の節減であり、図書費は最初の標的の一つとなる。場所の問題は図書費節減に大きな正当性を与える。何十年も前からの雑誌を保管しているような病院では、保管場所の確保に音をあげているはずだ。

1970年に大学を卒業した私は、その後医学論文とつきあうことになったが、当時はよかった。医療経済もどんどん成長していた時期であり、また今のように雑誌の種類も多くはなかった。欲しい本はそれほどの抵抗もなく購入してもらうことができた。この20年間で何種類の医学雑誌が増えたのだろうか。当院の最盛期には250種類の雑誌が図書室に置かれていた。

ところが、赤字である。今までのように図書費に多額の金をつぎこむことはできない。全体で○○円まで削減してほしいと言われるようになる。こうなると各診療科が黙ってはいない。病院は金儲けが目的ではないはずだ。図書がそろっていることは良い医療を提供するのに必要な前提条件である。経費節減と良い医療の議論がかみ合うはずがない。「やむを得ない」「そんなのはおかしい」、議論とも言えない話し合いが延々と続く。図書費削減が問題となってからは図書委員会の委員長にはなり手がなくなった。

ところで、医学雑誌というのは何なのか。本だと思うからもめごとが多くなるということはないか。医学雑誌は何のために必要なのかを考えてみるに、医療の流れに遅れぬように最新情報を入手したい、欲しいと思ったときに手軽に情報を入手したい、文献の検索がしたい、要するに雑誌が欲しいのではなく、情報が欲しいのである。それも、必要なものが必要なときに必要なだけ得られればよいのである。

医療において必要な情報とは、日常の診療に利用する価値のある“何か”で、その情報は使われるものであってこそ価値がある。使えないもの、使われないものは情報としての価値は低い。

図書室に置いてあれば見たいと思ったときにいつでも見に行ける、たとえ1年に1度だけでも開かれればそれだけでも価値がある。あまり読まれない雑誌を図書室に置いておくことはむだではないかという意見に必ず出される反論である。また、似たような雑誌を整理できないかという意見には、多くの雑誌があればいろいろな知識が吸収できてよいという反論が出る。

ところで、新聞でも雑誌でもテレビでもニュースと称されるものは、同じ事を同じ時間に流している。同じ事なのだから、あっちで流してもこっちで流しても内容は一つである。医学雑誌にも同じような徴候があらわれてはいないだろうか。論文そのものにどれほどの価値があるのか言う資格を持たぬが、同じ執筆者が同じテーマであっちこっちの雑誌に書いているのを見るのは稀なことではない。

情報の不足は困るが、過剰なのもまた困る。

本と思うから妙な議論になってしまうということはないだろうか。私には確実にある。10円、20円を握りしめて、古本屋で1時間も迷って岩波文庫を買い求め、何度も何度も読み返す。そして、読んだ本について後日友人と時には夜を徹して語り合う、そんな時代があった。本は私にとって宝物だった。だから、手元に置きたい。置いて好きなときに好きなだけ読みたい。

そういう眼から見ると、医学雑誌は本ではない。医学論文には愛も人生もない。あるのは事実と論理だけである。したがって、これらの情報をいかに効率よく利用するかを考えればよい。無味乾燥なものに感傷や郷愁は無縁である。

病院における医学情報の価値はきわめて大きい。医師や医療関係者が良い質の医療を提供するために必要な情報を入手することは必須条件である。本人が情報を得るための努力をすることは当然としても、病院が情報を得やすいように環境を整えるのも大切な務めの一つである。

結局のところ、病院図書室の問題は予算、場所、人に制限のあるなかで、どのような情報をどのように効率よく手に入れるかであろう。情報を提供してくれるメディアをすべて洗い出して、その特徴を検討してみる。雑誌や本にこだわることはない。そして使用目的、使用頻度を検討し、その上で何を利用するのがよいかを検討するのがよい。私は、これからの時代はコンピューターによる情報システムの有効な利用という方向に向かうだろうと思っている。すでにがん情報の CD-ROM や PDQ*等、部屋にいて世界の情報が簡単に得られるシステムがいくつか開発されている。それでも、どうしても雑誌にこだわるなら、なぜ雑誌なのかを徹底的に論議してみるのがよい。

あれほど執着し、がんばって入れたんだからどうかなと思って図書室をのぞいてみる。明らかに一度も開かれたことのないバックナンバーが何冊もある。むだだなあと思うが、それよりもさびしくなる。本は読まれてこそ本であり、情報は使われてこそ情報である。病院の図書室には本でも情報でもない雑誌が多すぎはしないだろうか。

＊ＰＤＱ：PHYSICIAN'S DATA QUERY
オンラインデータベースのひとつ